

丸山キヨ子著「源氏物語と白氏文集」

東京女子大學研究叢書 3 東京女子大學學會 一九六四年八月 二四七頁

長年に亘つて源氏物語と白氏文集の比較文學研究にたずさわつて來られた東京女子大學教授丸山キヨ子氏が、過去の研究の成果を總括し一冊の著書として出版されたことを知つたのは昨年のことであつた。是非とも一度讀ませていただきたいものと念願していたが、圖らずも今度その機會

を得た。後記によれば着實に個々の研究を發表していられたようだが、その全てを目にすることができず、この著書によつて通讀させていただいた。

比較文學の初歩の心得も無い者が批評など許されることではないけれど、主として前半の第一篇「媒體としての白氏文集探究」の中で二三感じた所を記すことにした。

○

源氏物語が白氏文集より受けた影響については、その説の觀點が直接的にせよ間接的にせよ論じている人々が多い。が、從來の所謂比較文學研究は、源氏物語か或いは白氏文集言い換えると日本文學か中國文學の一方の側だけが重視されて、他方が輕視される傾向があつた。それは相互の文學の間に、特に平安時代に於いては密接な關係を持つがやはり本質的に全く異なる兩つの文學を對象とすることに起因するものと思う。その偏向も避けられないことのようにあつた。著者はこうした過去の比較文學研究が陥り易かつた弱點を脱却して新しい独自の道を開かれた。

私が特に興味を持つて讀んだ第一篇の各論の中で、先ず

「第一章源氏物語と中國文學―影響關係ありと思はれる作品檢出―」の項では實に丹念に源氏物語の中で中國文學との關連ある個所を指摘され、著者の基準で三分類してリストに整理するという作業を行なつていられる。私などは約二百個所に上るその膨大な數に壓倒されて再吟味を半ばで斷念させられた。せめて源氏物語の本文を多少なりとも載せていただければと思ひ甚だ残念であつた。

三段階の分類というのは

「第一類 最も痕跡の顯著なものとして、直接中國文學を引用してゐるもの。」

第二類 媒介物の比較的明らかなものとして事柄の類似を媒介的辭句によつて指示し言及してゐるもの。

第三類 媒介的辭句も端的に示されてゐず、顯はな言及もないが、表現の類似から、解釋上どうしても背後に中國文學を想定しなければならぬもの、あるひは背後に中國文學を想定することによつて一層興味深く鑑賞され得るもの。」

以上の三類である。(六頁)

この三分類の中で第三類に屬するものが最も問題であらう。數量に於いても他の二類とは比較にならない。著者もまた今までの比較文學研究より一步先んじた試案として、その評價を世に問われたものであらう。只七頁にも亘るこの第三類の表を眺めて、分類に際して著者は恐らく躊躇されたはずであるが、その例が全く記載されなかつたことに對してかえつて不安を感じさせられた。この第三類を著者は「解釋者の主觀」が最も入る部分と説かれている。三分類の中では極めて判別し難いものである。先の定義を見ても、その複雑な内容と廣範圍な類型を包括することが容易に想像できる。私どもはその著者獨自の主觀と同時に、この分類に關して當然抱かれた疑惑とを幾つか提示して、それに對する著者の見解を語つていただきたかつた。また時折ちらりと源氏物語の注釋書にお觸れになるが、その中でせめて藤原伊行の源氏釋から北村季吟の湖月抄に至る所謂古注と稱されるものがどの程度まで著者が出典と名付けられるものを指摘していたかを表示願えたら大いに參考とならう。中國に於いては古えの注釋を尊重する。日

本に於いても同じことと思うからである。

また第三類の例としてお擧げになつた

「桂の院といふ所、にはかに作らせたまふ、と聞くは、そこにすえたまへるにや、と思すに心づきなければ、をののえさへ改めたまはむほどや待ちどほに、と心ゆかぬ御けしきなり」(松風の卷) 「氣近うち静まりたる御物語すこしうち亂れて、千年も見聞かまほしき御有様なれば、をのえも朽ちぬべけれど、今日さへは、とて急ぎかへりたまふ」(松風の卷) 「まことにをのえも朽たいつべう思ひつつ、日を暮す」(胡蝶の卷) は、どれも「斧の柄」に關する故事である。述異記(梁の任昉)また水經注(後魏の酈道元)にも見えている。晉の時代に王質なる者が、石室山に伐木に出かけた所、童子たちが碁をうち(琴を弾き)歌つていた。それに耳を傾けていると棗の實のような物を童子から與えられ口に入れると空腹を全く感じなかつた。しばらくして歸ることを促され、ふと見ると斧の柄が腐敗し、家に歸ると(數十年が経過して)顔なじみは誰もいなくなつた、というような類型的な傳説の一種である。こ

の三例をそれぞれ松風の卷は三類、胡蝶の卷は二類という風に區別された。後者を二類と認められたのは「まことに」の一語が「單なる表現の類似以上に、明らかに背後に故事をふまへてゐる事を指示する」ためであると述べていらる。この三例の分類の微妙な差を只この一語に求めることは著者の繊細な文學意識によるものであろうが納得し難い點がある。またこれらの「斧の柄」の話が、原典である述異記、水經注から直接引用したものかどうかは、著者のお言葉通り再考の余地が十分にあると思う。

中國に關して言えば、既に唐代こうした逸話に關する知識は類書から得たものが多かつた。類書が典故の供給源にさえなりうるようになっていた。日本でも平安時代に日本人の手でアレンジされた一般人を對象とする類書が普及していたと考えられないだろうか。源氏物語が何らかの形で中國文學を引用したとお考えで並べられた書名を一瞥して、その多種多様なことに驚きもしたが、果たしてこの中でどれだけの書物を、源氏物語の作者を含めた平安時代の人々が讀み、理解していただろうかという氣がしたのであ

る。

また著者は「出典」あるいは「典故」といつた言葉を隨處に用いていられる。が、「斧の柄」の出典は述異記、「いのち長ければ」が莊子（外篇、天地、堯曰多男子則多懼、富則多事、壽則多辱、是三者非所以養德也を引用している）とだけで簡単に斷言されると、「出典」「典故」とは何かという疑問を感じて來る。「斧の柄」や「いのち長ければ」の類は、語が單に日本風に移入されているのみで、その原典の内容や思想は消化されていない。こういうものを私どもは「典故」「典故」などとは呼ばない。また一言付け加えると、「出典」という語は比較的新しいものであり、俗語では「質に入れる」という意味を持つ語である。過去の中國にあつては何れの時代にも古えを尊重する。人間の理想社會は古代にこそ存在したと考える。古代の理想の世に述べられ書かれた書物は、永遠の古典として人々の心に生き續けその生活規範にまでなつて來た。それは當然文學の世界でも同じである。古典つまり經書の類がその文學觀の根底に流れることは否定できぬ眞實である。「出處」「典

據」「典故」と呼ばれるものは、中國の古代崇重の精神から生まれ、後代まで繼承されて來ている。一語の使用といえども「典故」ある表現は大變重い意味を持つものなのである。日本に於いては事情が異なるのではないだろうか。「出典」ということから言えば、むしろ源氏物語の古歌の引用、引き歌の方が、中國で普通「典故」と稱するものに移しと言うに應わしいと言ふべきであらう。

第二章源氏物語に影響を與へた白氏文集——源氏物語引用の長恨歌に徴して系統を探る——。第三章源氏物語の作者が手にした文集は七十卷ではなかつたか。この二章は、著者が中國文學の分野に入り込んで研究された白氏文集傳本についての論である。第二章で葵の卷の長恨歌の引用が、通行本白氏文集と異なつている事實に端を發し、白氏文集諸本の中から金澤文庫本を高く評價されている。白氏文集研究者にとつて貴重な資料である同書が、著者の源氏物語の比較文學史的考察の結論によつて、傍證の一つを得ることができた。第三章に於いて著者は最近の白氏文集研究の狀況とその成果を懇切丁寧に紹介されている。日本文學研

研究者が欲する白氏文集研究の現在の状態は、これによつて
ほぼ知り得るであろう。更に、金澤文庫本の源流として、
南禪院本系統（六七巻本）と、江家本系統（二七〇巻）の二
本の想定という専門家の説から、源氏物語の作者紫式部の
手にした白氏文集が後者の方ではなかつたかとの考察をさ
れている。その論證として、一、源氏物語そのものの徴標。
二、物語作者の父爲時の詩にみられる影響關係。三、大江
匡衡と爲時との交友關係を述べて、大江家の七〇巻本の爲
時の手に入り易がたことを考證された。この卓越した識
見が、更に他方面からより積極的な證據によつて支えられ
るならば、白氏文集と源氏物語の比較文學研究が一步前進
したことになり、劃期的な學說になるはずのものである。
また著者の今後の研究の成果如何によつては、中國文學研
究者も啓發される所が少なくないであろう。

第二章、第三章は、外側からの白氏文集の研究ではない。
内側に立たれた上での研究である。原典に對するこうした
眞摯な探究は、從來の比較文學研究者には見られなかつた
ことで、この著書の重要な特點の一つに數えうる。

書 評

「第二篇 源氏物語に與えた白氏文集」の中「第二章源氏
物語と長恨歌」では、中國文學で源氏物語に最も深い影響
を與えているのは白氏文集であり、特に長恨歌からの影響
が大であると論じていられる。長恨歌全部を載せて、細大
洩らさぬ調査研究によるこのお説は拜聽するに足りるもの
と感歎したのである。長恨歌について一言附し、何かのご
參考にしていただけたらと思う。

長恨歌は唐の玄宗皇帝と楊貴妃の戀愛を語つた長篇の詩
である。がその發想は楊貴妃死後の玄宗皇帝の悲しみの追
憶から生まれたものであり、その基調は得た愛の喜びより
も、愛の對象が消滅した後の悲痛な感情の表現の方に重點
がおかれている。この悲劇的な愛の詩が、中國では女の側
から述べられるのが普通なのに、男の側から語られている。
それも絶對的權威の象徴である皇帝が愛人を失つた悲しみ
を心底を隠す所なく述べていることにこの詩の特殊性があ
る。過去の中國には描かれなかつた愛の姿が詠じられてい
る。ここに長恨歌と源氏物語の一つの融和點があつたので
はないかと私などは解釋してみたいのである。

全體を通してうかがえる著者の態度は、一度日本文學を棄て去り、影響を與えた方の中國文學を徹底的に追及した後、再び享受者の立場である日本文學に立ち戻つて考察するということを根底としていられるよう、「源氏物語」を讀み解くことこそ、比較文學研究の眞の道に通ずるものとお考えのようである。似た研究方法を持つ人は多いが、著者のように詳細に緻密にこのテーマと取り組まれたのは初めてと言つてよいであろう。同時にその研究の成果は一つのテストケースとして多くの問題を含んでいることを豫想させる。その究明と解決とが著者、更にはこの道にたずさわる者に賦された今後の課題であらう。

(京都大學 西村富美子)